



TITLE:

ワークショップを終えて

AUTHOR(S):

中山, 大将

CITATION:

中山, 大将. ワークショップを終えて. 2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集 2015: 189-190

ISSUE DATE:

2015-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198392>

RIGHT:

ワークショップを終えて

中山 大将

研究者とは、国家への忠誠よりも、民族への紐帯よりも、故郷への思慕よりも、郎党への義理よりも、知への愛(philosophy)に忠実な者である。だからこそ、我々の間には自然に連帯感が生まれる。本ワークショップが形式的な外交に陥らず豊かな交流を実現できたのは、言論の自由があるからこそであると改めて思い知らされる。言論の自由なくして、自由な議論なく、自由な議論なくして真の交流はあり得ない。しかし、矢内報告が取り上げた福島原発事故に関する情報規制やその後の特定秘密保護法制定などを受けて、言論の自由度ランキングにおける日本の順位は 50 位代にまで落ちてしまった。憲法が保障しているからと言って、何もせずに言論の自由が維持されるわけではない。

折しも 2015 年は第二次大戦終結 70 周年である。国民の意思決定機関への現役武官の参加、普通選挙の停止による国政参政権の国民からの剥奪、一部エリートの権力独占、言論の自由の統制等々は、単に学問の自由を脅かすだけでなく、東アジア一帯を災禍に陥れた要因であり、決してその危険性を忘れてはならないし、このような軍国主義的で全体主義的ないかなる体制も我々は容認してはならない。それこそが我々があの災禍から得た尊い教訓である。自由とは東の空から自然に昇って来るものではなく、日々の行使の中で護って行かなければならないものである。研究者は愛知の人であるが故に、自由・平等・公正という普遍的価値の実現のためにも不断の努力をしなければならない。誰かに与えられたプロパガンダやイデオロギーによってではなく、自らが集めた事実と自らが備えた理性によって思考をし、そして仲間と不断の議論をしなければならない。有名な滝川事件等々、かつては国家権力による学問の自由への侵犯の舞台となったこの京都大学において行われた本ワークショップが、明日の日中の学問の自由を護り、未来へと東アジアの自由をつなげていくことに少しでも貢献できたのなら、参加者の一人として嬉しい限りである。

自身の報告で述べたように、サハリン、台湾では民主化によって新しい歴史学が現われた。国民の代表を僭称する独裁的政党が自身の政権の正当性を糊塗するための国家史を住民が放棄し、歴史記述の権利を住民が取り戻すことで地域史への転換が起きたのである。それは国家から割り当てられた地方史ではない。抑圧された地域、抑圧された人々が自分たちの過去と声を取り戻すための営みである。

中国社会研究の門外漢ながら、南京大側の一連の報告を通して、南京大側の論調にはいくつかの共通点があるように感じた。第一に単純化された「伝統」社会や東アジア社会認識、第二にすでに共有されているあるべき社会像が実際の社会では実現していないという現状認識、第三にその原因を個々人の内面的問題に求めることである。こうした議論の仕方は日本の学界ではあまり見られないように思われる。なぜそのような差異があるのかまで議論するにはワークショップは短か過ぎた。しかし、こうした疑問をひとりひとりが持つことで、今後の交流がさらに豊かになることを期待したい。

本ワークショップは事業としては終了した京都エラスムス計画に端を発している。東アジアにおける知の交流ネットワークを創り出すだけでなく、学問の自由、言論の自由そして普遍的価値を追求するネットワークと連帯を創り出さんとする試みとして、今後も継続することを望む。

结语 中山 大将

所谓研究者即是执着于对知识(philosophia)热爱的人，这种热爱甚于对国家、民族的忠诚、对故乡的思慕、对手足的情义。正因如此，一种希望能聚到一起的意识才会在我们之间自然发生。在经历了 5 年的交流，我深刻感受到言论自由对于本论坛能够实现丰富的交流目的是何等重要。没有言论自由就没有自由的讨论，没有自由的讨论也就没有真正的交流。然而，正如矢内同学报告指出的有关福岛核电站事故的信息控制和之后日本政府颁布的《特定秘密保护法》，在今年“无疆界记者”发表的“全球新闻自由指数”中日本从 2012 年的 22 位降到了 53 位。虽然日本的宪法保障了言论的自由，但这并不意味着我们可以完全不努力。

2015 年是第二次世界大战结束七十周年。现役军官加入到国民意志决定机关、通过停止普选褫夺国民的参政权、部分精英独占权力、控制言论自由等等，这些不单是对学术自由的威胁，还是曾使东亚一度陷入灾难的主要原因。我们不应忘记这些现象所伴随的危险性，并且也不应容忍任何军国主义、全体主义的体制。这是我们从第二次世界大战的灾难中得到的最为宝贵的教训。自由并非自然从东方升起，而应在每天行使自己权利时保护它。

因为研究者是爱知之人，因此也应为实现自由、平等、公正等普世价值而努力。不是带着从谁那里得到的政治宣传或意识形态，而是应通过自己收集的事实和自身具有的理性进行思考、分析，还不忘与友人不断讨论。从全球观的视角监视一切对自由的挑战，进而将被压制地区和人民的情况公布于众。对于在曾经发生“泷川事件”等，国家政权侵犯学术自由的舞台——京都大学召开本论坛，我们的交流若对未来继承中日学术自由、乃至东亚的自由做一点贡献，作为参与论坛的一员，我也会无比欣慰。

如我在论坛的报告指出的，近年由于民主化的发展，萨哈林岛及台湾岛出现了新的史观。人们放弃了僭称为人民代表的独裁政党为粉饰自己的正统性而捏造的国家史，通过夺回自己对历史记述的权利，从而出现了向地域史转换的情况。这并非是国家史中分割出来的地方志，而是被压迫地区、被压迫人民夺回自己的过去和“声音”的行动。

虽然在中国社会研究方面，我还是个外行，但我对南大同学有关中国社会所进行的报告颇有兴趣。在论调方面，我感觉有以下共同之处。第一是对“传统（前近代）”社会和东亚社会认识的过于简单化。其次是在进行现状分析时，设定了某些前提。比如在没有分析和讨论之前，就认定某种社会状况是这个社会所应有的状态之类。第三，对社会问题的分析，趋于从个体的角度进行寻求，而非从社会或其他方面。在近年的日本学界，特别是人文社会学领域，这样的认识几乎很少见到。为什么会出现这些差异，由于论坛的时间太短，我们无法关于这些差异进行讨论。然而，我希望每个人都能带着这些疑问，希望今后的交流能够更加丰富、精彩。

本论坛始于目前已经结束的“京都伊拉斯谟计划”，衷心期望这个论坛今后也能继续。希望我们的行动不仅能在东亚编制出新的知识交流网络，也能为学术的自由、言论的自由、乃至对普遍理念的追求做出贡献。